

「フルネーム」生田修平

子どもの頃、吉太郎じいちゃんから聞いた話である。吉太郎は横浜の貿易会社に勤めていた。時は、1960年代後半。フックスも普及しておらず（註）、連絡はもっぱら電話だった。

この会社は食品、雑貨、書籍などどちらかというと少額品を扱っていた。吉太郎は輸出も輸入も担当。少額だけに件数は多く、忙しかった。通関業者のH運輸には頻繁に電話した。ピーク時は5分おきにダイアルを回し、1日に100回を超える日も少なくなかったほどだ。

H運輸の担当は田村俊之（タムラトシユキ）という30代の男性だった。吉太郎がH運輸に電話すると、田村が直接出る時もあるし、他のスタッフが受話器を取った場合、「田村さんお願いします」と言うと、田村に代わってもらう。どこにでもある光景である。

ところが、ある時期から変化が起きた。

まず、田村が直接出ることが滅多に、いや皆無になった。さらに、「田村さんお願いします」と告げると、「どちらの田村ですか」と返してくるようになった。吉太郎が「田村俊之さんです」と指名すると、すぐに担当の田村が出るのだが、何度電話

しても、「田村さんお願いします」には、「どちらの…」と返ってくる。

推察するに、もう一人、田村姓の社員が加わり、下の名前の確認が必要になったのだろう。しかし、吉太郎の担当が田村俊之であることは明白だ。わざわざフルネームを言わせなくとも、つないでくれればよさそうなものだが、とにかく苗字だけでは通してくれなかった。吉太郎はフルネーム確認のやり取りが煩わしくなり、最初から「田村俊之さんお願いします」と指名するようになった。

そんなある時、書類の提出にH運輸に出向く機会があった。田村俊之は外出中だったので、アシスタントの女性に書類を受け取ってもらった。その時、おそらく最近入ったもう一人の田村に挨拶しようと思った。吉太郎がその旨を伝えると、女性はややニヤつきながら「当社の田村は田村俊之のひとりでございます」と言い張った。

どういふことなのか。ならば、フルネームを確認する必要はないではないか——。私は不可解な気持ちになったが、ここで女性を追及するわけにもいかず、事務所を後にした。

帰社後、早速、田村に電話する用事ができた。今回は俊之を省き、「田村さんお願いします」というと、相変わらず「どちらの田村ですか」と返ってきた。吉太郎はさすがに「田村性は複数いるのですか」と突っ込んだ。「当社の田村は田村俊之のひ

とりでございますが、フルネームを確認させていただいています。どちらの田村ですか。吉太郎は納得がいなかったが、このことで押し問答する暇もなく、「田村俊之さんお願いします」とやや不満げな口調でつぶやいた。

その後も、吉太郎は「田村俊之」とフルネームを繰り返していたが、さらに妙な発見があった。

H運輸には田村に電話するのが圧倒的だが、営業の吉川さんに電話することがあったが、名刺交換したことがないため、下の名前が分からなかった。吉太郎は「吉川さんお願いします」と告げた。すると、「どちらの吉川ですか」とはならず、すぐに吉川さんにつないでくれたのだ。1回で通過できたのはうれしかったが、田村の時の対応とは整合性が取れない。どうやら、会社として「フルネーム確認」の徹底はできていないようだ。

その後、H運輸の山木さん、幸村さんに電話した際も、下の名前は聞かれなかったが、田村だけはフルネーム確認が続いた。つまり、フルネーム確認はすべての社員に徹底しているわけではなく、田村のみで実施しているようなのだ。

「どちらの田村ですか」と聞かれるようになって3カ月。一体、「田村俊之」と何回、口にしたのか——そんなことを考えていた夏のある日、出社直後の朝、「田村俊之さんお願いします」とH運輸に電話すると「田村は退職しました」と返ってきたのだ。

たのだ。

午後、外出した。参院選が事実上スタートし、街中に候補者のポスターが張られつつあった。その一つを見て驚いた。「田村俊之」ではないか。顔もH運輸の田村俊之その人だ。

そうだったのか——吉太郎はこの時、すべてを理解した。

3カ月前、田村俊之が参院選に挑戦することになり、H運輸は会社ぐるみで応援することにしたのだ。

有名人ではないうえ、どこにでもいるような名前だ。フルネームでの知名度アップが最大の課題だったにちがいない。そこで、田村宛の電話について「どちらの田村ですか」と聞くことにより、相手に「田村俊之」を連呼させていたのである。

3カ月間、星の数ほど「タムラトシユキ」を繰り返し、フルネームが染みついていった吉太郎は投票用紙に「田村俊之」と力強く書いた。

田村俊之は神奈川選挙区で見事当選。その後、誰も思いつかないユニークな政策を次々と打ち出し、当選を繰り返し、老若男女、誰もがフルネームを知っている「愛される政治家」となった。

註) 昭和22年版(1976年)「通信白書」によると、全国のファックス設置台数は1965年約2000台から1970年は約7000台へと増えているが、当時、圧倒的多数の会社には

ファックスはなかった。同白書は「このようにファクシミリは、技術開発の進展により今後多様な発展が期待されている。また、日本は漢字を使用している国であり、文字の種類の少ない言語で、かつタイプライタが普及している欧米諸国と異なり、基本的にはファクシミリ通信の利用に適している」としている。

完